

マルコによる福音書 13 章 「時代を知る」

アウトライン

1A 崩れ去る栄華 1-2

2A 世の終わり 3-31

1B 産みの苦しみ 3-8

2B 迫害と宣教 9-13

3B 大患難 14-23

4B 天変地異 24-27

5B 来臨の徴 28-31

3A 分からない「その日、その時」 32-37

本文

今年も後残りわずかとなりましたが、今年は皆さんにとってどのような年だったでしょうか。今日は、イエス様が世の終わりについてお語りになられたところから御言葉を聞きたいと思います。マルコによる福音書 13 章です。イエス様が十字架に付けられる最後の週に、エルサレムの東にあるオリーブ山から神殿を眺めておられたところ、弟子たちの質問に答えて世の終わりについてお話になりました。

1A 崩れ去る栄華 1-2

13:1 イエスが、宮から出て行かれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。」13:2 すると、イエスは彼に言われた。「この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積みたまま残ることは決してありません。」

エルサレムにある神殿は、弟子たちがここで感嘆しているように非常に荘厳な建物でした。ユダヤ人が、神を礼拝するために造られたものですが、それは世界の七不思議の中に入るほどすばらしいものです。建築年数はゆうに90年ぐらいかかりました。大理石によって造られ、黄金に包まれていました。

けれども、イエスさまはこうおっしゃったのです。「この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積みたまま残ることは決してありません。」弟子たちは、これを聞いてショックでした。開いた口がふさがらないどころか、全身が震えたことでしょう。ユダヤ人にとって、神殿は、絶対ななければいけないものであり、彼らの生活の中心でした。それがなくなるということは、彼らにとって死を意味していたのですが、イエスが今、石が他の石に積み上げられることなく、すべて破壊されるだろう、と言われたので、彼らはもともこうもなくなって、イエスさまにお尋ねしたのです。「そんな

ことが起こるのですか。それなら、この世の終わりはいつ起こるのでしょうか。どのようなことが前兆に起こるのでしょうか。」それで、イエスは次から、世の終わりについて長々と語られます。

実際にこの神殿、イエス様がこの言葉を語られたから約 40 年後、紀元前 70 年に文字通りそのとおりになりました。そのときはローマ帝国がユダヤ人を支配していましたが、後に皇帝となるローマ総督・ティトゥスが、エルサレムを包囲し、ユダヤ人を何百万人と飢え死にさせ、殺し、残りの者は奴隷としてローマに連れていきました。神殿には火が付けられ、黄金は溶けて、大理石の裂け目の中に入ったのです。ローマは金を集めたかったので、石から金を取り出すために、一つ一つ石を取り外していきました。そして、ついに、一つの石がほかの石に積み上げられることなく、すべて取り外されたのです。イエスのことばは、その通りになりました。

このように弟子たちは、自分たちの根幹を揺さぶるようなことが、突如として起こることを教えられました。自分たちが頼りにしていたものが突如としてなくなり、壊れてしまうことによって、私たちの心は動揺します。自分の息子がとつぜん倒れて、死んでしまった。会社がまったく予期しないで、倒産してしまった。そして、私たちが頼りにしているものがなくなってしまうということが起こります。

それでもなおかつ、人が人として希望をもって生きるにはどうしたらよいのでしょうか？その解答が聖書の中にあります。永遠の命の希望があります。いつまでも変わらない命があります。すべてのものが過ぎ去っても、なおかつ残る神の国があり、その国の市民になることができるという希望です。この希望をしっかりと持っているのでしょうか、それとも世にある目に見えるものだけを見つめておられるのでしょうか。次から見るイエス様の説明を通して、私たちが何に注目しなければならないかを見ていきたいと思えます。

2A 世の終わり 3-31

1B 産みの苦しみ 3-8

13:3 イエスがオリーブ山で宮に向かってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにイエスに質問した。13:4 「お話しください。いつ、そういうことが起こるのでしょうか。また、それがみな実現するようなときには、どんな前兆があるのでしょうか。」

オリーブ山から、エルサレムの城壁の東門とその後ろにある神殿をはっきりと眺めることのできる場所があります。そこには、主が涙を流されたことを記念する教会が建っていますが、主がご自分を受け入れずに、エルサレムとともにイスラエルの民が滅ぼされることを悲しんだからです。

13:5 そこで、イエスは彼らに話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。13:6 わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそそれだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。13:7 また、戦争のことや戦争のうわさを聞いても、あわててはいけません。それは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。

イエス様は初めに「惑わしを受けるな」と言われます。逆に言うと、多くの人がある出来事をもって「これで終わりだ」というからです。キリストの名を名のるものが大ぜい現われることと、戦争のことです。この2つは、終わりのしるしではありません、とされています。キリストを自称する人たちは、これまで実に大ぜい現われました。日本にも、麻原彰晃だとか又吉イエスだとか、自称キリストはいろいろいます。そして、これまでの人間の歴史の中で、戦争をしていない期間より、戦争をしている期間のほうが圧倒的に多いのです。だから、これら二つは終わりのしるしではありません。

13:8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、ききんも起こるはずだからです。これらのことは、産みの苦しみの初めです。

ここから終わりの日の徴の始まりです。民族が民族に敵対し、国と国が敵対し、方々に地震があって、飢饉があるならば、それは産みの苦しみの始まりです、とされました。ルカによる福音書には「疫病」も含まれています。

民族が民族に敵対する、国と国が敵対する、というのは、聖書の中で世界規模の戦争のことを意味しています。人類の歴史の中で、地域紛争はたくさん起こるが、世界がグローバル化して、戦争もグローバルになるとき、世の終わりが始まっています、と言っています。20 世紀に何が起こったでしょうか。二つの世界大戦がありましたね。

そして、地震も一万人以上死ぬという大規模なものは、19 世紀までの記録を全部合わせても 20 世紀に起こった頻度数のほうが多いと言われています。そして、もちろん、経済格差によって飢饉と飢餓は世界規模のものになりました。

そして疫病は、新型インフルエンザ、少し前は SARS、そして AIDS など数多くの者が 20 世紀から 21 世紀にかけて出現しています。

イエスは、ここで、世の終わりのことを「産みの痛み」と呼ばれています。これは陣痛のことです。世界崩壊の話だけを聞いていたら、私たちは恐怖に包まれます。怖くなります。けれども、陣痛が始まったとき、お母さんの中で恐怖に包まれた方はいらっしゃいますか。いませんよね。

以前、私とほぼ同じ年の友人が、二人目の赤ちゃんが与えられたと知らせてくれました。午前3時に陣痛が始まって、5時に出産という超スピード出産だったと言っていました。また、その一方で、50時間の陣痛が続いたという方の体験談を読んだことがあります。個人差はあるそうですが、初産(しょさん)の人は平均で13時間、二度目以降は6時間ぐらいだと言われています。

陣痛は、断続的に 10 分以内の単位であって、その間隔がしだいに縮まって、赤ちゃんが出て来る直前はもっとも苦しいときです。けれども、分娩の直後は、赤ちゃんが生まれたことの喜びで、今

までの苦しみを忘れてしまいます。イエスさまは、世の終わりは、このようなものだ、とおっしゃっているのです。つまり、希望がある苦しみです。むしろ、輝かしい将来が訪れるために、通っていかなければいけない苦しみののです。

2B 迫害と宣教 9-13

13:9 だが、あなたがたは、気をつけていなさい。人々は、あなたがたを議会に引き渡し、また、あなたがたは会堂でむち打たれ、また、わたしのゆえに、総督や王たちの前に立たされます。それは彼らに対してあかしをするためです。13:10 こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。13:11 彼らに捕えられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。13:12 また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。13:13 また、わたしの名のために、あなたがたはみなの方に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

世の終わりの時のもう一つの徴は、「今までにないキリスト者に対する迫害があり、けれども今までにない速度で福音宣教が進む。」ということです。クリスチャンであるというだけで、裁判を受けたり、むち打たれたりします。クリスチャンであるということで迫害された人は、教会が誕生したときからそうでした。そして有名なのは、ローマ帝国による迫害です。ある人は生きたまま火あぶりにされ、また、競技場でライオンがいて、そこにクリスチャンを入れて、観客はクリスチャンが食い殺されるのを見えています。

けれども、迫害は、今世紀になって、もっとも大規模になっていると言われています。今世紀に殺されたクリスチャンは、1世紀から20世紀までに殉教したクリスチャンよりも、さらに数が多いと言われています。マスコミが伝えていないし、国際人権機関も行動を取っていないので表ざたされませんが、そうなのです。

迫害があるなら福音は広がらない、と私たち人間は思います。けれども聖書ではその逆の流れを記しています。むしろ迫害があればあるほど、神はご自分の働きを世の反対を乗り越えて行なわれます。世界宣教の速度が、きわめて速くなっています。これまでに一度も福音を聞いたことのない民族は、急速に少なくなっています。宣教師が入っていくことのできないイスラム圏では、夢と幻を通してイエス様に会い、教会を訪れた時には既に信仰を持っているという人々が続出しています。

12 節に、家族の間で分裂があることを主は予め語られています。それは、福音を受け入れたがゆえに、家族が反対するからです。イエスを自分の主にして生きることには犠牲がともなうからです。「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘

をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしします。(マタイ 10:34-39) 私たちは、この心の準備ができていますか。

3B 大患難 14-23

13:14 『荒らす憎むべきもの』が、自分の立ってはならない所に立っているのを見たならば(読者はよく読み取るように。)ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。13:15 屋上にいる者は降りてはいけません。家から何かを取り出そうとして中に入はいけません。13:16 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。13:17 だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。13:18 ただ、このことが冬に起こらないように祈りなさい。13:19 その日は、神が天地を創造された初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日だからです。

終わりの日におけるもう一つの大きな徴は、イスラエルに対する神の働きです。神殿が紀元 70 年経ってから、ユダヤ人が世界に散らばり離散の民となりましたが、その後で、ここに書かれているように「ユダヤ」に住む人々がまた起こされる、というのです。また、「自分の立ってはならない所に立つ」とは、他の福音書を見ると「聖所」のことであり、これはダニエルが預言したことであることを教えています。

聖書の中には、イスラエル人が神から約束の土地を与えられ、また国が与えられることが約束されています。けれども彼らが神に背くことによって、そこから引き抜かれ国々に散らされることも主は語られました。事実、紀元前 722 年にはアッシリア帝国が、586 年にはバビロン帝国が、それぞれ北イスラエルを捕え移し、南ユダを捕え移しました。そして紀元 70 年にローマが捕え移しました。

けれども、主はその神の裁きの後に、再び彼らを集めて、彼らの国を回復させてくださる約束も与えてくださっています。これが紀元 70 年以後に、見ることができたのが、「産みの苦しみ」が始まった 19 世紀から 20 世紀にかけてなのです。世界に散らばっていたユダヤ人が、第一次世界大戦が 1914 年に勃発しましたが、それを前後に大量のユダヤ人がパレスチナに帰還しました。そして 1945 年に第二次世界大戦が終結しましたが、それを契機に 48 年イスラエルが建国されました。エルサレムは、67 年に勃発した六日戦争によってイスラエルの主権下に入りました。

今、その神殿の丘を管理しているのはイスラム教の団体です。けれども、その敷地に神殿の器具を入れようと準備している正統派ユダヤ教徒の団体があります。そして、今、不安定になってい

るこの世界で、イスラエル人自身が、神殿再建にこそ回復と救いがあると期待し始めています。

このことを成し遂げる天才的な指導者が現れることを、ダニエルは預言しました。9章27節です。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。(ダニエル 9:27)」この荒らす忌むべき者は、他の箇所では「反キリスト」と呼ばれる、終わりの時に世界中に荒廃をもたらす人物であります。

彼が再建された神殿の聖所の中に入り、我こそは神であると宣言します。そして彼を拝まない者は殺されます。手と額に数字が組み込まれ、それがないと売ること買うこともできません(黙示 13章)。この男が世界を支配する時、それがイエス様がここで語られている「苦難の日」あるいは、「大患難」と呼ばれるものです。

ですから、今、イスラエルが存在し、そして世界全体が、イスラエルを取り巻く環境によって動いているのは、まさにイエス様が言われた通りなのです。私たちは特別な時代に生きています。

13:20 そして、もし主がその日数を少なくしてくださらないなら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、主は、ご自分で選んだ選びの民のために、その日数を少なくしてくださったのです。13:21 そのとき、あなたがたに、『そら、キリストがここにいる。』とか、『ほら、あそこにいる。』とか言う者があっても、信じてはいけません。13:22 にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます。13:23 だから、気をつけていなさい。わたしは、何もかも前もって話しました。

ここの「選ばれた民」とは、反キリストの手を逃れて隠れているユダヤ人のことです。彼らが、この苦難の中で自分たちの救い主を願い求め始めるのですが、その中でさらに惑わしがあります。偽預言者、偽メシヤがさらに現われるとのこと。しかも、徴や不思議を試みさせます。

私たちは、「あそこに今、キリストがいる。」と言っている人々に気をつけなければいけません。主がどのように戻ってこられるのか、それははっきりとしています。マタイによる福音書によると、それは稲妻のようで、東から西へ、すべての人が認めることのできる大きな出来事になる、ということです。一部の人しか知らないものでは決してありません。

4B 天変地異 24-27

13:24 だが、その日には、その苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たず、13:25 星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。13:26 そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。13:27 そのとき、人の子は、御使いたちを送り、地の果てから天の果てまで、四方からその選びの民を集めます。

世の終わりの最終的な徴は、天変地異です。もうこれで、私たちは何も頼れなくなります。自分にお金がなくなっても、家族がいなくなっても、どんな悪いことが起こっても、今、立っている土地がなくなることと比べたら、まだ良いです。けれども、その時に主が来られます。すべてのものが過ぎ去ろうとしている時に、いつまでも変わらない主イエス・キリストが戻ってこられるのです。

ここの「**選びの民**」とは、イエスを自分の救い主として受け入れるユダヤ人たちが、約束の地に戻ってくる姿です。では、教会における神の民はどこに今いるのでしょうか。黙示録 19 章によると、「**天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を来て、白い馬に乗って彼につき従った。(14 節)**」とあります。彼らが天において、イエス・キリストとの婚姻を行なう花嫁として出てきます。教会は、すでに天におり、もっと前に天に引き上げられていたのです。

この一大出来事について、パウロがイエス様からはっきりと御言葉をいただきました。テサロニケ第一 4 章です。「**主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。(1テサロニケ 4:16-17)**」これが、終わりの日について私たち信仰者が経験する第一の出来事になります。詳しくは 32 節以降でお話します。

5B 来臨の徴 28-31

13:28 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。13:29 そのように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。13:30 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。

いちじくはイスラエルの地域で、夏になって実を結ばせる植物です。非常に新鮮ないちじくの実を市場で買うことができます。だから彼らにとって、イチジクの木が柔らかになること、葉が出てくることは、夏が近づいたと実感させる風景でした。同じように、これまでイエス様が語られたことが見え始めたら、世の終わりが近づいたと知りなさいと言われているのです。

どうでしょうか？私たちはあらゆる面で、今が終わりの時であることを知っています。すでに枝は柔らかになり、葉が出て来ているのです。「この時代」となっている所は「この民族」と訳すこともできる箇所です。そうすると「ユダヤ民族」ということになります。彼らがここまで生きてきたこと自体が、奇跡です。そして将来、とてつもない患難を経ても最後まで生き残ることを主は約束されています。

13:31 この天地は滅びます。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。

この御言葉を心に焼き付けましょう。私たちが手にしている聖書の言葉は、今、私たちが立っている地上よりも、もっと堅固で、永続するのです。

3A 分からない「その日、その時」 32-37

13:32 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。13:33 気をつけなさい。目をさまし、注意していなさい。その定めの時がいつだか、あなたがたは知らないからです。

31 節まで主は、徴を見たならば人の子が来るのを知りなさい、と言われていたのに、ここでは「いつ来るか分からない」とおっしゃっています。一見矛盾するような言葉ですが、先ほど読んだテサロニケ人への手紙4章にある出来事(「携拳」とも言いますが)があることを知れば、理解ができます。

「携拳」は、いつ起こるか、その前に何の前触れも徴もない出来事です。コリント人への手紙第一15章には、携拳についてこう説明しています。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。(1コリント 15:51-53)」一瞬のうち、英訳聖書では、「瞬きをする間に」と書いてあります。私たちがほんの少しの準備もできないままで、急激に引き上げられるのです。

多くの人が、「その日、その時がいつであるかは、わからない」というイエス様の言葉を持って、「近い」という人々は間違っている。それは時を定めることだ。一年後かもしれないし、百年後かもしれない。」という説明をする人々がいます。けれども、「いつ来るか分からない」といのは、「目をさまし、注意しなさい。」とイエス様が言われているほど、差し迫ったことなのです。明日どころか、今日、いやこの時間に起こるかもしれない、切迫した出来事なのです。

13:34 それはちょうど、旅に立つ人が、出がけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目をさましているように言いつけるようなものです。13:35 だから、目をさましていなさい。家の主人がいつ帰って来るか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、わからないからです。13:36 主人が不意に帰って来たとき眠っているのを見られないようにしなさい。

主がすぐにでも来られるという神の真理を知った人々、そして世の終わりの徴を見ている人々は、それをただ知るだけでなく、生活の中で大きな変化が与えられるし、また変化させていかなければいけません。それは、「主から任されている仕事を、注意深く、しっかりと行なう。」ということです。主の働きに、これまで以上に切迫感をもって関わっていくことです。

13:37 わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。」

主は念を押しておられます。「すべての人に言っているのです。」と。オリーブ山で聞いている 4 人の弟子以外に、このマルコによる福音書を読んでいるすべての人に、イエス様は言われています。「目を覚ましなさい」という命令です。

私たちは何を見ているかで、今の生活が決まります。神の幻が、いま私たちが読んだところです。そしてテレビや新聞が伝えるこの世があります。どちらの幻を携えて生きているかで、生活が 180 度変わります。主の働きに従事する源泉は、主が戻ってこられるという希望なのです！